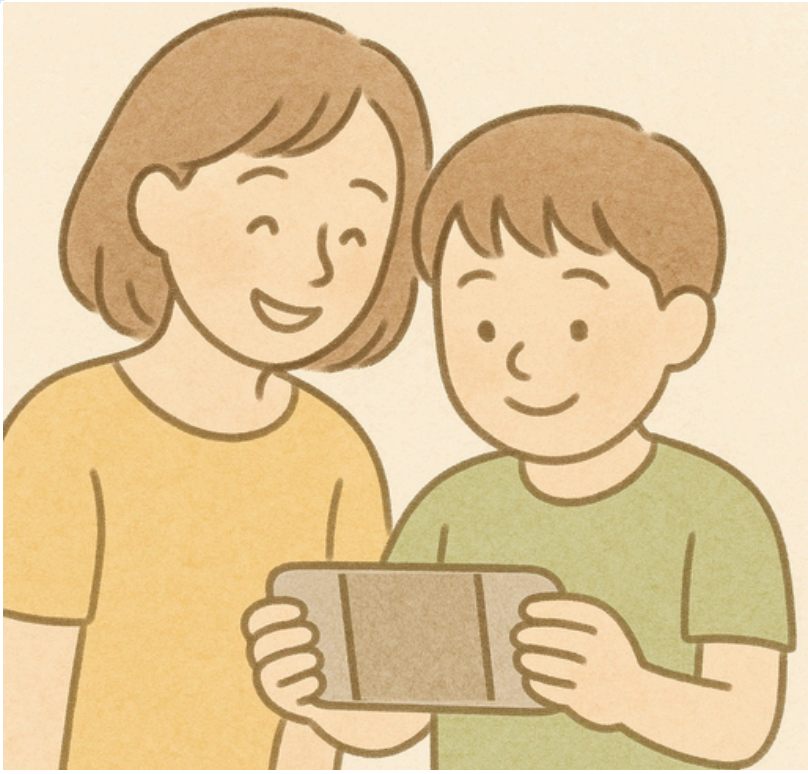
ゆりいか通信

第１５号　　令和７年　７月



子どもの「好き」を共有してみる

まもなく夏休みが始まります。子どもが学校に行っていてもいなくても、親子ともに毎朝の登校にむけてのストレスから解放される時期ではないでしょうか。

日々の時間に追われがちな日常とは違い、夏休みは少し長いスパンで行動を考えることができるという利点もあります。子ども自身のペースを大切にしながら過ごすことができる夏休みは、親子にとって違う形で子どもとかかわることのできる貴重な機会かもしれません。この夏、子どもと「同じ目線」で過ごす時間を増やしてみてはいかがでしょうか。

例えば子どもが夢中になっていることに少し関心を向けてみるという感じが良いかもしれません。ゲームをしている子どもに「どんな風に面白いの？」と素直に尋ねてみたり、実際に一緒にプレイしてみたりすることで、なぜそんなに一生懸命になっているのかが見えてくることがあります。そうすると、ゲームをやめるタイミングについても、ただ「〇時になったらやめる」と一律に決めるのではなく、「セーブポイントまで進んだらやめる」など、子どもが納得しやすい形で提案ができるかもしれません。

動画などに熱中している子どもには、「何を見てるの？」「どんなところが好きなの？」と声をかけてみてください。子どもが画面の中に何を見ているのか、どんなことに惹かれているのかを知ることで、子どもとの距離がぐっと近くなることがあります。

子どもの関心を深く知ることは、保護者側からの働きかけにも変化をもたらします。

たとえば、ゲームや動画の舞台になっている場所に一緒に出かけてみる、関連する活動を一緒にやってみる――そんなふうに、子どもが今興味をもっていることを軸に、少しだけ日常の幅を広げることもできます。またその中で、大人の視点だからこそ気づけるリスクや留意点をやわらかく伝えることもできるでしょう。

この夏、お子さんの心の地図にそっと寄り添いながら、親子で新しい経験を共有してみてください。

恩庄　香織

Our Activities

京都大学 ヒューマンライブラリー

ヒューマンライブラリーとは、読者が図書館で本を選ぶように、読み手（参加者）が本（語り手）を選んで話を聞き、対話をする企画です。

今回京都大学の授業の一環として行われているヒューマンライブラリーに本（語り手）として参加しました。

全体テーマは「支える人」ということで、不登校の子どもたちを支える人、支える人を支えるということについて話をしました。なかなかできない本当に貴重な体験をさせていただきました。

カリンバ体験会 【保護者・支援者向け】

７月６日（日）は午後２時からカリンバ体験イベントでした。当初、上京区総合庁舎区民交流会議室を予定していましたが、選挙に伴い使用不可となってしまったため場所をこりす西陣に変更して行いました。

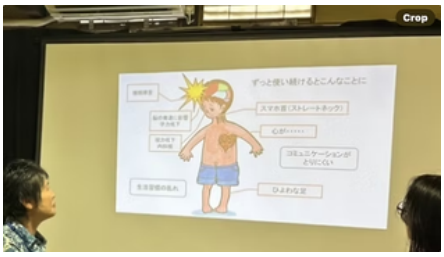
カリンバを自由に鳴らしてみたり、カリンバで「会話」をしてみたりするところから始め、持ち方や弾き方を確認してきらきら星を演奏してみました。その後最後はみんなでアメイジング・グレイスを合奏。一人で奏でてもきれいですが、何人かで弾くとまた違う心地よさがありました。

またこのようないべントを行いたいと思いますので、ぜひご参加ください。

フラッペ

６月のフラッペでは、「保護者のための情報モラル」をテーマに、京都市教育委員会の情報モラル教育市民インストラクター、菅原　邦美さんをお迎えしました。

各ゲームには推奨年齢が表示されているそうです。購入するときにはそういった推奨年齢や内容を理解し、保護者がきちんと子どもが利用状況を把握したうえで上手に関わるという視点の大切さや、またスマホ依存を防ぐための保護者の関わり方について学びました。



７月は「メンタルヘルス」について専門の講師の先生をお招きしてお話をお伺いします。

詳細や申し込みについては、ゆりいか研究会のウェブサイトをご覧ください。

Upcoming Events

7/12 ♥ わいわいギャザリング

カリンバをさわってみたり、ボードゲームをしたりして過ごしましょう。

7/20 ◇ フラッペ勉強会・交流会

京都府精神保健福祉総合センターから講師の方をお招きし、メンタルヘルスを考えます。

8/？ ★ 教職員向けゆりいか勉強会

日頃子どもたちと接していて気になることを専門家の先生にお話ししていただきます。

8/24 ◇ フラッペ勉強会・交流会

今回は特にテーマを決めずに「ゆるりお話し会」としてざっくばらんに交流します。

ゆりいか研究会

★ 教職員・若者支援者対象
◇ 保護者・若者支援者対象
♥ 高校生年代の若者対象

いずれも詳細はゆりいか研究会ウエブサイトをご覧ください。

今月のコラム

今月は、ゆりいかニュースレターの連載小説の作者さんからのコラムです。

ちょっと植えてみただけなのに

ある日、散歩の途中である家の玄関先の緑の木の間から白い袋が幾つもぶら下がっているのを見かけた。「ブドウ？」気になったので、足を止めてよく見てみた。その植物はコンクリートの上に置かれた大きなプラスチックの容器に植えられていた。これなら我が家でも出来ると思った。別の日その家の前を通りがかった時、ちょうどそこの持ち主が表におられたので声をかけてみた。

「ブドウは今年で十年目です。最初の五～六年実が成らなかった。」と教えてくださった。

家でブドウを食べた時にそのことを思いだし、食べた後の種をちょっとした遊び心で他の花の隙間に植えてみた。

大した期待はしていなかったが、翌年プクッと新芽が出てきて可愛さのあまり心が躍った。そして、大きい陶器の鉢を用意して大切に育てようと思った。それでも数年間は実がなる気配もなく、葉や蔓だけが伸びる日々だった。でも、芽吹くたびに感じる小さな喜びが世話を続ける力になった。その甲斐もあって毎年蔓が伸びてきた。ある程度大きくなると今度はその蔓のために柵を置いた。ブドウの蔦の絡まる風情は、私の心の癒しとなった。

そして去年、ついに一房のブドウがなった。待ちに待ったブドウは感無量だ。虫達に喰われない様に大切に袋掛けし、果実が大きくなるのを待った。黄緑色だった実が紫に色づいたのを見て、もう食べごろだろう、とハサミを入れた。パチっと音がして胸の奥から幸せが溢れた。

お皿に載せたブドウは、小粒ではあったが甘味が口一杯に広がった。それまで自分でブドウを育てているということ自体に満足し、成長を楽しんできていたので、味のことまでは考えていなかった。市販のブドウでも、甘さの中にも強い酸味を感じることがある。ところが、初めて実った私のブドウは、小粒ではあったけれど、ひと口食べるとまっすぐな甘さが口いっぱいに広がった。育ててきた年月を思い出すと、いっそう愛おしく感じられ、一粒一粒をゆっくりと大切に味わった。

先日水やりをしている時にふと鉢に目をやると、生まれたての黄緑色した小さな実が六房成っている。飛び上がる程嬉しかった。

これらの房を大切に育てようと四本の支柱を立てた。その果実を傷つけない様に蔦を支柱に絡めると、幾つもの実が顔を出した。今年も虫達に喰われないように一房一房心を込めて袋掛けした。今年は六房のブドウを誰に食べてもらおうかと想像するだけでワクワクする。

ブドウの食べた後の何気ない一粒の種が、毎年こんなにも幸せを運んでくれるなんて。園芸は本当に楽しいと、つくづく思う。

宮美遊

Thanks to

THE PEOPLE WHO WARMLY SUPPORT US

支援者の皆様（３月中旬～下旬、順不同）

Micro Hydropower Study Group
マイクロ水力発電研究会 MHSG

一般社団法人
京都わかくさねっと
KYOTO WAKAKUSA NET
女の子の居場所とおいしいご飯

Cafe Bowwow

子どもと家庭の相談室
こころのそえぎ
福本早穂
（臨床心理士・公認心理士）

ゆりいか研究会

ゆりいか研究会
大人たちのトッカツ！フラッペは
毎月第３日曜日午後の開催です

ゆりいか研究会
平日の午後フリーな若者の居場所
♭ふらっと♭メンバー募集中！

ゆりいか研究会
わいわいギャザリングは
毎月第２金曜日の翌日開催です

ゆりいか研究会
協賛広告を募集しております。
関心のある方はご連絡ください。

ゆりいか研究会
その他の形のでもご支援ご協力も
募っております。

多喜誠子さま、杉本さま、宮坂 修平さま、T.OGAWAさま他１名

クラウドファンディングおよびその他の形で協賛・寄付をしていただいたみなさまに心より感謝申し上げます。campfire community におきまして引き続きクラウドファンディングを受け付けております。
また協賛広告や直接の寄付も受け付けております。
関心をお持ちの方がいらっしゃいましたらぜひお声がけください。

《連続小説》

金鶏鳥

幼少期（十三）

宮美遊

「大丈夫か？」
驚いて池の縁に上がった信男の足には、蛭（ヒル）が両足に五～六匹ぶら下がっていた。それを見た。信男は、
「こわーい」
と泣きだしてしまった。
その中の一匹凄（すご）く大きな蛭を、弥次郎爺様は右手で取った。それを左手に持ち替えて、右手で小さな蛭を取った。蛭たちは、ポトポトと地面に落ちた。弥次郎爺様は左手にある一匹のヒルを見せて、信男に
「大きな蛭はウマイゾ」
と言いながら、両手でコロコロ丸めると丁度栗（くり）のようになった。弥次郎爺様は「これ、やろう、栗やで食え」
と冗談を言い、信男の手を引き寄せて手の平に乗せた。
「アー怖わ、アー怖わ」と信男は
おびえた。弥次郎爺様は
「血を吸われる前にサッサと取ったら大丈夫や」
とニコニコと笑って地面に捨てた。
信男は、なかなか気持ちが落ちつかなかったが、何とか蛭が取れてホッとした。その信男の様子を見ながら、幼い信男の仕草に愛らしいと弥次郎爺様は微笑（ほほえ）んでいた。

この小説は、明治・大正・昭和と激動の時代を乗り切った実在の人物をモデルとした小説です。先行き不透明な現代を生きるヒントが得られるような気がします。ぜひこれからも楽しんでご一読ください

挿絵：NEPO

絵：落葉画廊

編集後記

このひと月、さまざまなイベントに挑戦しました。イベントが決まった時はワクワクし、近づくと不安が高まっていました。けれど、始まると夢中のうちに時間が過ぎ、終わってしまうとちょっとさびしい気持ちです。
新しいことに踏み出すには勇気がいりますが、そっと背中を押してくれる応援の気持ちがあるからこそ動けているのだと思います。応援してくださる皆様いつも本当にありがとうございます。

（恩庄か）

おしらせ

★フラッペ
8月のフラッペはテーマを決めずにお話し会にします。ですので、勉強会・交流会の区別なく無料で行います。8月のみ第4日曜日となりますのでご注意ください。皆様の参加をお待ちしております。

★令和7年6月号までのゆりいか通信をウェブサイトに掲載しました。